

皆様と
病院を結ぶ
情報誌

すまいるみと

外科外来より乳腺外来の分離のお知らせ

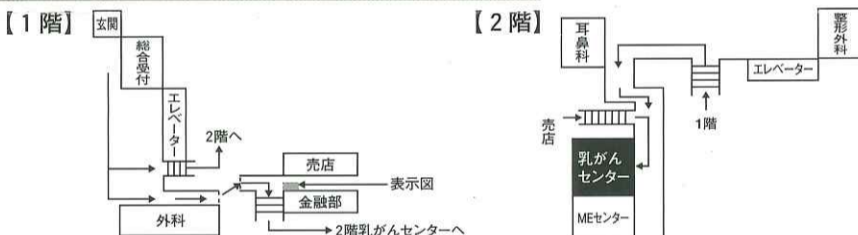
患者様のご希望もあり六月一日より乳腺外来が外科外来より分離し、東棟二階へ移転しました(地図参考)。外来で乳がんの術後、化学療法を施行する症例も多く、今まで他科の外来ベッドを使用して行ってきました。このため患者様に長くお待ちいただく事が多かったのですが、同棟二階に乳がんセンターを開設したことによって患者様に寄与するものが多いものと期待しております。この開設によって患者様からの多数の「ありがとう」との感謝の投書もいただき、患者様に安心感を与えたことにほっとしております。但し、前田乳がんセンター長の負担は大変と思われれますので、そのスタッフの増員が可能であればやりたいと思っております。今後も温かい心でご支援下さい。なお、乳腺外来は下記のようになっております。よろしくお願ひ申し上げます。



乳腺外来ご案内

	月	火	水	木	金	土
午前	乳腺外来 8:30~11:00 乳がん検診 8:30~10:00	乳腺外来 8:30~11:00 乳がん検診 8:30~10:00	乳腺外来 8:30~11:00 乳がん検診 8:30~10:00	出張乳検	乳腺外来 8:30~11:00 乳がん検診 8:30~10:00	病棟
午後	手術	病棟	手術	乳腺外来 14:00~16:00 乳がん検診 14:00~15:30	病棟	

乳がんセンターの場所・行き方図：2通り



論壇



私の考える看護サービス

五東病棟(外科) 看護副部長
原田良子

今日、疾病構造の変化、超高齢社会等による社会環境の変化は、保健・医療・福祉に対して大きな影響を与えており、その変化に的確に対応する姿勢が強く望まれています。こうした中「医療はサービス業」という認識が普及し、看護サービスに対する意識も高まっています。

誰もが、健康で快適な生活を望んでいる中、入院をしなければならなくなった患者様に対して、治療の為多くの規制の中で、少しでも快適に毎日が送れるよう援助していくことが、看護のサービスと考えています。なぜなら、入院生活を日常生活の一コマと考える必要があるからです。

入院において看護のサービスとは、患者様の安全対策が第一条件です。事故や感染を防止し清潔で便利な入院環境を整備すること。科学的な知識、技術を習得した職員のチームワークが

看護サービスの質を向上させることで安全にながると考えています。

どこの病棟に入院しても、同様の看護サービスが受けられ、何よりも患者様が、満足して入院生活が送れるよう、日々努力して行くことが、看護師としての役割と考えます。

信頼される看護には「一貫性」「尊重」「知識・技術への確信」「安心感」「見通し」と五つの概念があります。この五つをキーワードに、看護師が中心となり、看護サービスの向上に努めること。そして患者様と一緒に、一日も早く、社会復帰できることを目標に、看護していきたいと考えています。

看護のサービスを、厳しく評価するのは、患者様、そして家族の方々です。その評価が看護の質を向上させ、患者様の満足に結びつきます。日々患者様家族の方々のニーズを充足すべく、努力したいと考えています。

NST(栄養サポートチーム)について

栄養技師部長 小林美津

「NST、それって何?」はじめて聞く人がたくさんあります。NSTとは、栄養サポートチーム Nutrition Support Teamの略称です。1970年にアメリカで始められました。アメリカにおいても入院している患者様のなかに栄養不良が多く、回復の遅れや合併症が起りやすく、死亡率を高くすることが明らかになりました。そこで、適切な栄養管理を実施するために、チーム医療で取り組むことになりNSTが生まれました。

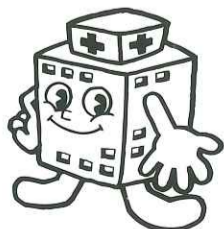
NSTは入院中スクリーニングで栄養アセスメントを行い、栄養療法(必要栄養量や投与経路)を実施するもので、医師を中心に、看護師、薬剤師、管理栄養士などの専門の知識と技術をもったスタッフがチームで話し合い、一定のレベルを保った栄養管理を行うものです。

入院している患者様の中には、基礎疾患に関係なくタンパク質やカロリー不足から低栄養状態に陥っていることがあります。患者様の栄養状態の把握、分析を行うために、身体計測、検査データ、病歴などを調べていきます。

食事でのくらしい食べられるか、どのくらい不足しているか算出して経口摂取を中心に適切な栄養補給剤を利用したり、摂取経路により静脈栄養や経腸栄養などから、最も適した栄養管理方法を検討していきます。

入院中の患者様が、できるだけよい状態で生活ができ、早く退院されるよう医療スタッフの協力のなかでチーム医療をすすめていくことが大切になっていきます。当院でも勉強会を始めながら活動できるよう準備をしているところです。

(NSTプロジェクトガイドライン参考)



新任医師の紹介



整形外科医師
小宮山千晴

七月より当院の整形外科に勤務しております。外傷(いわゆるケガ)や、慢性疾患(膝や腰の痛み、手足のしびれや傷みなど)を中心に診療を行っております。整形外科では神経・筋・骨・関節といった運動器を扱っており、具合の悪いところがあると日常生活の障害を生じます。力仕事をする方、家でじっとしていることの多い方など「生活」と言ってもその内容は様々です。治療に際しては患者さんの生活背景やご要望を伺いながら、より良い治療を行えるよう一緒に取り組んでいきたいと考えています。



外科医師
宮本純平

平成十三年 慶應義塾大学卒
専門分野 消化器外科
お腹の中には不思議なもので、これだけCTやMRIなどの画像診断が発達した今でも開けてみないとよくわからないことがあります。患者さんの話をよく聞き、より良いコミュニケーションをとれるよう努力していきたいと思っております。また病気になるかと憂うつになったり気分が落ち込むこともあるかと思えます。そういったことに対するメンタルヘルスのサポートも考えていきたいと思っております。



研修医
真壁健一

平成十四年 筑波大学卒
七月から九月まで外科で、十月から十二月まで内科で研修医として研修させていただくことになりました。患者さんの話をよく聞き、より良いコミュニケーションをとれるよう努力していきたいと思っております。また病気になるかと憂うつになったり気分が落ち込むこともあるかと思えます。そういったことに対するメンタルヘルスのサポートも考えていきたいと思っております。

看護の日を振り返る

手術室看護師長 小野瀬 文子

五月十三日に水戸協同病院看護部主催の看護の日を行いました。恒例になっているポスター展示も今年は、看護部の枠を越えて薬剤部、検査部、放射線部、臨床工学部MEセンターが参加し、十五の部署から出品がありました。日頃行っている業務を知っていただくことをテーマに作成しました。より多くの方の目に触れていただきたく、展示場所も玄関のロビーを中心に展示しました。血圧、血糖、身長、体重、経皮的血中酸素飽和度測定にも多くの人が訪れ、たくさんのお質問が寄せられました。介護用品、介護食品の展示も狭いスペースながら多くの品物が展示され手にとって見ることができ、充実した内容でした。

講演会は、生活習慣病、動脈硬化について、代謝内科・平嶺先生。食事療法とコレステロールについて、管理栄養士・小林栄養部長。介護について、紙オムツを使って寝たままでできるシャワー、布団の上でもできる足浴、後始末の楽なポータブルトイレの使い方、訪問看護指導室・遠西主任が行いました。いずれも盛況で入場希望者多数のため講演の途中で部屋を変えようということもありました。

午後一時三十分からミニコンサートを開きました。昨年も好評だったことから水戸市内の鈴木理恵さんら三人のグループの歌とバイオリン、キーボードをボランティアで演奏をしていただきました。病棟からもたくさんの方が聞きに来てくださり百三十名の入場がありました。院内で育てたミニひまわりを小児科の田中先生より提供していただきました。皆様協力していただきました。



医局長と対談

医局長・眼科部長 勝 又 俊 二



医局という言葉は、外来的な本館の五階にある。五階病棟の入院患者さんのお見舞いで、間違えて医局に患者さんを探しに来られる方が、何人もいらっしゃるので、くれぐれもご注意ください。なお、医局は、関係者以外の立ち入りは遠慮いただいております。その五階で、医師たちは、数人ずつに別れて研究室に入っており、どの医師も、たくさんの方の医学雑誌や患者さんのデータのファイルやさまざまな書類に取り囲まれて暮らしている。最近では、コンピュータでさまざまなデータを処理している医師も多い。五階の北東の角には、図書室と総合医局がある。図書室は、医局の医師のためのコンピュータ、テレビなどが置いてあり、新聞などを、小さなロビーで読むことができるようになっています。そこに、診療が一段落した医師が集まる。私の眼科医局時代と違って、医局の構成メンバーは、いろいろな診療科の医師である。そのため、ベテラン医師といえども、他の科の研修医に、具体的なアドバイスはできないことが多い。しかし、長年の経験を生かして違った角度からのアドバイスは可能である。また、他の科に紹介した患者さんのことをくわ

第一回臨床病理カンファレンス開催

病理科長 八重樫 弘

五月三十日(金)午後六時から仮設講義室で第一回臨床病理カンファレンスが開催されました。「臨床病理カンファレンス」とは病理解剖を行った症例の検討会です。当日は、週末前の忙しい夕方にも拘わらず、五十名を越す病棟スタッフが参加し、より質の高い医療の提供に役立てよう、熱のこもった討議が行われました。

最初に主治医(今回は耳鼻科症例)から臨床経過の説明と問題点の提議があり、つぎに病理より病理解剖所見の説明がありました。引き続き、所見に関係がある専門医や看護師も参加して詳細な討議が行われました。総合病院における医療の提供には、担当科のスタッフだけでなく病院全体のスタッフの緊密な連携が必要で、それにより更に質の高い医療の提供が可能になります。これからの医療に役立てるよう気持ちを新たにしたいと検討会でした。

第五十三回日本病院学会に参加

看護師長 川 又 光子

歴史と伝統ある第五十三回日本病院学会が平成十五年六月十二・十三日の二日間、大阪市の大阪国際会議場においてメインテーマを「道のため、人のため」という言葉の由来は、大阪は古くから交流の町であり、人・モノ・文化・情報といった様々なものが行き交った町で、明治の激動期に緒方洪庵が大阪に開設した適塾は、当代日本の蘭学塾として全国各地から大志を抱いた若者たちがここに集結。福沢諭吉、橋本左内など、多くの俊英を輩出しました。「道のため」とは、医学の本来的なあり方を、「人のため」とは、医療人の本分を示すもので、緒方洪庵が手紙に書き添える言葉として好んで使った言葉だそうです。日本病院学会は、日本病院会が主催するが、最大の規模を誇る病院人のための学会で、病院を構成するすべての職種が一堂に会して病院医療の質向上と病院経営の改善進歩に貢献するための学会で、今年度は看護部門では、菊池美恵子の「医療事故の分析」と川又の「看護師の教育評価」、臨床工学部の谷田部哲夫の「臨床工学部の設立について」の三題を発表して参りました。菊池の発表では、病院全体でシステミックに医療事故を取り組んでいる事には大変な評価を得ました。川又の発表では、看護師の卒業後の教育について質向上のための教育プログラムについて、谷田部の発表では医療機器管理を中央管理化しつつも安全に使用できるように保守点検していることに対して他病院から高い評価を受けました。二日間の開催で全国から五百二十二題の発表があり、中でも医療事故・安全管理に関することや顧客満足・感染対策・地域との連携に関する報告が多く印象に残り、どの会場でも活発な意見交換がされ医局の原点に立ち戻ったように感じました。

記念講演では、ノーベル物理学賞の東京大学名誉教授・小柴昌俊先生に「素粒子と宇宙」についての講演を拝聴致しました。小柴先生とは、その後の医療人の集いでも御一緒させていただきましたが、とても気さくで笑顔を絶やさない先生でありました。特別講演では大阪大学名誉教授・梅原昇先生に「適塾(緒方洪庵)と大阪」について、またその他多くの講演を聴く機会を得ることができ充実した二日間を過ごすことができました。改めて医療の置かれている厳しい現状を再確認させられた学会でした。

第四回市民セミナー開催!

七月十九日(土)第四回市民セミナーを梅香町のJ A 会館にて開催しました。

今回は水戸協同病院外科部長 兼乳がん検診センター長の前田正光先生による「乳がんの診断と治療」をテーマに行われ、講演の後、ビデオにより乳がんについて解りやすく解説しました。

セミナーには水戸市内のみならず、県内からも大勢の聴講者のなか行われました。

今回のセミナー開催は十一月中旬に行う予定です。



7月5日(土)七夕コンサートが昨年に続き行われました。今回はボーカルに荘司美由紀氏、トランペット斑目加奈氏、キーボード鈴木理恵氏を迎え、『ロシアより愛をこめて』『スイートメモリーズ』など、馴染みの深いポップスや、童話の語りかけなど趣向をこらした内容で、楽しいひとときを過ごしました。



学会発表 (4月)

- *第5回 World Congress Science & Football
 - 演題: The Relationship between Disorders and Conditioning for soccer players
 - 発表者: 整形外科 平野 篤 発表日: 4月12日
- *第77回 日本感染症学会総会
 - 演題: ①IgM抗体の検出により明らかになる小児における肺炎マイコプラズマおよび肺炎クラミジアの蔓延
 - ②肺炎マイコプラズマおよび肺炎クラミジアによる小児の下気道炎に対するアジスロマイシン細粒2日間投与法の効果の検討
 - 発表者: 小児科 田中 敏博 発表日: 4月17日
- *第29回 日本オストミー協会茨城支部大会
 - 演題: ストーマケアについて
 - 発表者: 外科 川崎 恒雄 発表日: 4月20日
- *第106回 日本小児科学会学術集会
 - 演題: IgM抗体の検出により明らかとなる肺炎マイコプラズマと肺炎クラミジアの蔓延
 - 発表者: 小児科 田中 敏博 発表日: 4月26日
 - 演題: 非定型病原体による下気道炎に対するアジスロマイシン細粒2日間投与法の効果の検討
 - 発表者: 小児科 田中 敏博 発表日: 4月27日

学会発表 (5月)

- *第76回 日本整形外科学会学術集会
 - 演題: Osgood-Schlatter 病の病態と原因 ~MRI およびX線による解析~
 - 発表者: 整形外科 平野 篤 発表日: 5月22日
- *第38回 日本理学療法学会学術大会
 - 演題: 総合格闘技選手の外傷、障害に関する調査
 - 発表者: リハビリテーション科 小田 桂吾 発表日: 5月23日
- *ひたちなか市整形外科会
 - 演題: スポーツ選手へのメディカルサポート
 - 発表者: 整形外科 平野 篤 発表日: 5月26日
- *第40回 日本小児外科学会総会
 - 演題: 茨城県における小児内視鏡下手術の実態調査
 - 発表者: 小児科 田中 敏博 発表日: 5月28日

学会発表 (6月)

- *第107回 日本眼科学会総会
 - 演題: Laser in situ keratomileusis による角膜前方偏位の経時変化に影響する因子の検討
 - 発表者: 眼科 加藤木寛和 発表日: 4月18日
- *Association for Research in Vision and Ophthalmology 2003 (ARVO2003)
 - 演題: Time Course of Changes in Corneal Forward Shift after Laser in situ Keratomileusis
 - 発表者: 眼科 加藤木寛和 発表日: 5月6日
- *茨城県看護協会 平成15年度現任教育研修
 - 演題: 褥瘡とスキンケア
 - 発表者: 看護部(外科外来) 金子佐知子 発表日: 5月22日
- *第50回 日本麻酔学会学術集会(指名講演)
 - 演題: 心控働とトロポニン
 - 発表者: 麻酔科 大久保直光 発表日: 5月29日
- *第95回 茨城整形外科集談会
 - 演題: イリザロフ式創外固定器による橈骨遠位端骨折2症例の治療経験
 - 発表者: 整形外科 野澤 大輔 発表日: 5月31日

- *下妻研究グループ勉強会
 - 演題: ヒトとその子育ての自然なあり方を支援する
 - 発表者: 小児科 田中 敏博 発表日: 6月7日
- *第53回 日本病院学会
 - 演題: 現任教育計画の評価
 - 発表者: 看護部(4西) 川又 光子 発表日: 6月12日
 - 演題: スタッフによる組織横断的な患者安全管理への取り組み
 - 発表者: 看護部(4西) 菊池美恵子 発表日: 6月12日
 - 演題: 当院におけるME機器の管理について(臨床工学部の設立にあたり)
 - 発表者: 臨床工学部 谷田部哲夫 発表日: 6月13日
- *河内町渾清田保育所父兄会
 - 演題: ヒトとその子育ての自然なあり方を考える
 - 発表者: 小児科 田中 敏博 発表日: 6月14日
- *ひたちなかブロック保育協議会・研修会
 - 演題: ヒトとその子育ての自然なあり方を支援する
 - 発表者: 小児科 田中 敏博 発表日: 6月17日
- *第169回 茨城県内科集談会
 - 演題: 気管支転移を来たした乳癌の1症例
 - 発表者: 呼吸器内科 菊池 教大 発表日: 6月21日
- *第48回 日本透析医学会学術集会・総会
 - 演題: 透析機器におけるリスクマネジメント
 - 発表者: 臨床工学部 大内 智之 発表日: 6月22日
- *茨城県教育庁主催 平成15年度運動部活動外部指導者研修会
 - 演題: 中・高校生期におけるスポーツ障害とその予防
 - 発表者: 整形外科 平野 篤 発表日: 6月28日
- *第74回 日本小児科学会茨城地方会
 - 演題: インターネットを利用した茨城麻疹流行情報システム
 - 発表者: 小児科 田中 敏博 発表日: 6月29日
 - 演題: 医学生の小児科・学外臨床実習の受け入れを経験して
 - 発表者: 小児科 田中 敏博 発表日: 6月30日

論文発表 (4月)

- *掲載誌: 小児科 3月増刊号 最近話題の用語—知っておきたい豆知識—44巻4号
- 論文: 頭部冷却療法
- 著者: 小児科 田中 敏博 分類: 総説

論文発表 (5月)

- *掲載誌: 新版 スポーツ外傷・障害の理学診断理学療法ガイド
- 論文: Osgood-Schlatter 病
- 著者: 整形外科 平野 篤 分類: 本

論文発表 (6月)

- *掲載誌: 日本監事新報 No. 4129
- 論文: 製薬企業の使命感が小児用医薬品に光をもたらす
- 著者: 小児科 田中 敏博 分類: 論説
- *掲載誌: Expert Nurse エキスパートナース2003・5臨時増刊号
- 論文: ①酸素濃度計の較正はどのようにすればよいのでしょうか。②在宅酸素療法の呼吸指導で、呼吸が4、吸気が2というリズムはどのようにしてでしょうか。なぜ5:3や3:1ではないのでしょうか。
- 著者: 臨床工学部 谷田部哲夫 分類: 本